

システムの哲学の構築に向けて

玉置 久 (Hisashi Tamaki) 神戸大学
森 一之 (Kazuyuki Mori) 三菱電機株式会社
大倉 裕貴 (Yuki Okura) 富山県立大学
黒江 康明 (Yasuaki Kuroe) 同志社大学・京都工芸繊維大学
五十嵐涼介 (Ryosuke Igarashi) 京都大学

オーガナイザ・司会

菊池 誠 (Makoto Kikuchi) 神戸大学

システムとは相互作用する部分からなり環境の中に置かれた総体を意味する概念であり、1940年代に提唱されたウィナーのサイバネティクスやベルタランフィの一般システム理論によって提示された領域に依存しない普遍的な概念である。1960年代に航空宇宙工学や原子力工学に代表される巨大な科学技術が発展したことでシステムという概念の重要性が強く意識されるようになり、システム的设计や制御を対象とするシステム工学が構築され、1970年代に入るとオートポイエーシスや複雑系という概念が誕生し、1990年代には効率的な思考方法としてシステム思考も提示された。しかし最近の情報通信技術の発展や自然環境、社会環境の急激な変化によって、システムという概念は従来の枠組みでは理解できないものになりつつある。

さて、サイバネティクスが制御と通信を主題とすることからも明らかのように、本来、システムと情報は対となる概念である。最近の科学技術の進展や環境の変化に応じて、情報については数多くの興味深い哲学的な議論が展開されている。当然、それらの議論の中ではシステムについても言及されているが、システムそのものを主題とする哲学的な議論は少なく、システムという概念の変化は今でも十分には理解できていない。システムという概念の変化が提示する問題はこれまで哲学が議論してきた話題と重なる部分が多く、システムの哲学を十分に展開することは、現在の科学技術や環境についての新たな知見を提示すると共に、古典的な哲学に対しても新たな解釈を与える可能性を持つと考えられる。

このワークショップでは、システムの内外の区別に関わる概念や、システムとしての理解の鍵となるモデル化の特徴や限界について、工学における具体的な事例に基づいて、新しいシステム概念がどのような特徴を持つのか、その概念についての考察が哲学の古典的な議論とどのように重なり、哲学にどのような問題を提示するのかについて、工学者、哲学者を交えて議論したい。